日本現代文学全集 45

近松秋江
葛西善藏集

日本現代文學全集 45

近松秋江集
葛西善藏集

講談社

日本現代文學全集
45
近松秋江・葛西善藏集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

初版 第1刷
昭和40年10月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著者 近松秋江
葛西善藏

裝幀 蟹江征治

發行者 野間省一

印刷 信毎書籍印刷株式會社
製本 黑柳製本株式會社

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽2-12-21
郵便番號 112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替 東京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106456-2253 (2)

(文1)

近松秋江集　目次

卷頭寫眞

筆蹟

別れた妻に送る手紙……七

疑惑……四一

黑髮……七五

狂亂……九一

霜凍る宵……一一七

舊戀……一四六

舊戀（續篇）……一七一

子の愛の爲に……一八八

第二の出產……二三四

作品解說……平野　謙　四〇一
近松秋江入門……澁川　驍　四〇七
年　譜……四一四
參考文獻……四二九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

葛西善藏集　目次

卷頭寫眞

筆蹟

哀しき父……二五五
惡魔……二五九
贋物……二六四
子をつれて……二七九
浮浪……二九〇
父の出郷……三〇三
不良兒……三〇九
父の葬式……三三六
蠢く者……三四〇

椎の若葉……三四九
湖畔手記……三五四
血を吐く……三六八
死兒を產む……三七一
われと遊ぶ子……三七五
醉狂者の獨白……三八四

作品解說……平野　謙　四〇五
葛西善藏入門……澁川　驍　四一〇
年　譜……四二二
參考文獻……四三〇

近松秋江集

あかね色
伊豆の海
明けそめて
島根を洗ふ
初汐の音

秋江

別れた妻に送る手紙

拜啓

お前――別れて了つたから、もう私がお前と呼び掛ける權利は無い。それのみならず、風の音信に聞けば、お前はもう疾に嫁いてゐるらしくもある。もしさうだとすれば、お前はもう取返しの付かぬ人の妻だ。その人にこんな手紙を上げるのは、道理から言つても私が間違つてゐる。けれど、私は、まだお前と呼ばずにはゐられない。どうぞ此の手紙だけではお前と呼ばしてくれ。また斯樣な手紙を送つたと知れたなら大變だ。私はもう何うでも可いが、お前が、さぞ迷惑するであらうから申すまでもないが、讀んで了つたら、直ぐ燒くなり、何うなりしてくれ。――お前が、私とは、つい眼と鼻との間の同じ小石川區内にゐるとは知つてゐるけれど、丁度今頃は何處に何うしてゐるやら少しも分らない。けれども私は斯うして其の後のことをお前に知らせたい。いや聞いて貰ひたい。お前の顏を見なくなつてから、やがて七月になる。その間には、私には種々なことがあつた。

一緒にゐる時分は、ほんの些とした可笑いことでも、悔しいことでも卽座に打ちまけて何とか彼とか言つて貰はねば氣が濟まなかつたものだ。またその頃はお前の知つてゐる通り、別段に變つたことさへなければ、國の母や兄とは、近年ほんの一月に一度か、二月に三度ぐらゐしか手紙の往復をしなかつたものだが、去年の秋私一人になつた當座は殆ど二日置きくらゐに母と兄とに交る〴〵手紙を遣つた。

けれども今、此處に打明けようと思ふやうなことは、母や兄には話されない。誰れにも話すことが出來ない。唯せめてお前にだけは聞いて貰ひたい。――私は最後の半歲ほどは正直お前を恨んでゐる。けれどもそれまでの私の仕打に就いては隨分自分が好くなかつた、といふことを、十分に自身でも承知してゐる。だから今話すことを聞いてくれたなら、お前の胸も幾許か晴れよう。また私は、お前にそれを心のありつたけ話し盡したならば、私の此の胸も透くだらうと思ふ、さうでもしなければ私は本當に氣でも狂れるかも知れない。出來るならば、手紙でなく、お前に直に會つて話したい。けれどもそれは出來ないことだ。それゆゑ斯うして手紙を書いて送る。

お前は大方忘れたらうが、私はよく覺えてゐる。あれは去年の八月の末――二百十日の朝であつた。お前は、

「もう話の着いてゐるのに、あなたが、さう何時までも、のんべんぐらりと、ずる〴〵にしてゐては、皆に、私が矢張しあなたに未練があつて、一緒にずる〴〵になつてゐるやうに思はれるのが辛い。少しは、あなただつて人の迷惑といふことも考へて下さい。いよいよ別れて了へば私は明日の日から自分で食ふことを考へねばならぬ。……それを思へば、あなたは獨身になれば、何うしようと、足纏ひがなくなつて結句氣樂ぢやありませんか。さうしてゐる内にあなたはまた好きな奧さんなり、女なりありますよ。兎に角今日中に何處か下宿へ行つて下さい。さうでなければ私が柳町の人達に何とも言ひやうがないから。」

と言つて催促するから、私は探しに行つた。

二百十日の蒸暑い風が口の中までジャリ〴〵するやうに砂塵埃を吹き捲つて夏劣けのした身體は、唯歩くのさへ怠儀であつた。矢來に一處あつたが、私は、主婦を案内に空間を見たけれど、假令何樣な暮しをしようとも、これまで六年も七年も下宿屋の飯は食べない

で來てゐるのに、これからまた以前の下宿生活に戻るのかと思つたら、私は、其の座敷の、夏季の間に裏返したらしい疊のモジヤ〳〵を見て今更に自分の身が淺間しくなつた。それで、

「多分明日から來るかも知れぬから。」

と言つて歸りは歸つたが、どう思うても急に他へは行きたくなかつた。といふのは强ちお前のお母さんの住んでゐる家——お前の傍を去りたくなかつたといふのではない。それよりも斯うしてゐて自然に、心が變つて行く日が來るまでは身體を動かすのが怠儀であつたのだ。加之錢だつて差當り入るだけ無いぢやないか。歸つて來て、

「どうも可い宿はない。」といふと、

「急にさう思ふやうな宿は何うせ見付からない。松林館に行つたら屹度あるかも知れぬ。彼處ならば知つた宿だから可い。今晩一緒に行つて見ませう。」

と言つて、二人で聞きに行つた。けれども其處には何樣な室もなかつた。其の途中で歩きながら私は最後に本氣になつて種々と言つて見たけれど、お前は、

「そりや、あの時分はあの時分のことだ。……私は先の時分にも四年も貧乏の苦勞して、またあなたで七年も貧乏の苦勞をした。私も最早貧乏には本當に飽き〳〵した。……假令月給の仕事があつたつて私は、文學者は嫌ひ。文學者なんて偉い人は私風情にはもつたいない。私もよもやに引されて、今にあなたが良くなるだらう、今に良くなるだらうと思つてゐても、何時まで經つてもよくならないのだもの。それにあなたぐらゐ猫の眼のやうに心の變る人は無い。一生當てにならない……。」

斯う言つた。そりや私も自分でも、さう偉い人間だとは思つてゐないけれども、お前に斯う言はれて見れば、丁度色の黑い女が、お前は色が黑い、と言つて一口にへこまされたやうな氣がした。屢く以前、

「あなたは何彼に就けて私をへこます。」と言ひ〳〵した。私は「あゝ濟まぬ。」と思ひながらも隨分言ひにくいことを屢ゝ言つてお前をこき下した。それを能く覺えてゐる私には、あの時お前にさう言はれても、何と言ひ返す言葉もなかつた。それのみならず全く私はお前に滿六年間、

「今日は。」

といふ想ひを唯の一日だつてさせなかつた。それゆゑさうなくつてさへ何につけ自信の無い私は、その時から一層自分ほど詰らない人間は無いと思はれた。何を考へても、何を見ても、何をしても白湯を飲むやうな氣持もしなかつた。……けれども、斯樣なことを言ふと、お前に何だか愚癡を言ふやうに當る。私は此の手紙でお前に愚癡をいふつもりではなかつた。愚癡は、もう止さう。

兎に角、あの一緒に私の下宿を探しに行つた晩、

「あなたがどうでも家にゐれば、今日から私の方で、あなたのゐる間、親類へでも何處へでも行つてゐる。……奉公にでも行く。……好い緣があれば、明日でも嫁かねばならぬ。……同じ歲だつて、女の三十四では今の內早く何うかせねば拾つてくれ手が無くなる。」

と言ふから、

「ぢや今夜だけは家にゐて明日からいよ〳〵さうしたら好いぢやないか。さうしてくれ。」と私が賴むやうに言ふと、

「さうすると、またあなたが因緣を付けるから……厭だ。」

「だつて今夜だけ好いぢやないか。」

「ぢやあなた、一足前に歸つていらつしやい。私柳町に一寸寄つて後から行くから。」

私は言ふがまゝに、獨り自家に戻つて、遲くまで待つてゐたけれと、お前は遂に歸つて來なかつた。あれツきりお前は私の眼から姿を隱して了つたのだ。

それから九月、十月、十一月と、三月の間、繰返さなくつても、後で聞いて知つてもゐるだらうが、私は、お前のお母さんに御飯を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

炊いて貰つた。お前も私の癖は好く知つてゐる。お前の洗つてくれた茶碗でなければ、私は立つて、わざ〳〵自分で洗ひ直しに行つたものだ。分けてもお前のお母さんと來たら不精で汚らしい、そのお母さんの炊いた御飯を、私は三月――三月といへば百日だ、私は百日の間辛抱して食つてゐた。

お前達の方では、これまでの私の性分を好く知り拔いてゐるから、あゝして置けば遂に堪らなくなつて出て行くであらう、といふ量見もあつたのだらう。が私はまた、前にも言つたやうに、自然に心が移つて行くまで待たなければ、何うする氣にもなれなかつたのだ。

それは老母の身體で、朝起きて見れば、遠い井戸から、雨が降らうが何うせうが、水も手桶に一杯は汲んで、ちやんと緣側に置いてあつた。顏を洗つて座敷に戻れば、机の前に膳も据ゑてくれ、火鉢に火も入れて貰つた。

段々寒くなつてからは、お前がした通りに、朝の焚き落しを安火に入れて、寢てゐる裾から靜と入れてくれた。――私にはお前の居先きは判らぬ。またお母さんに聞いたつて金輪際それを明す譯はないと思つてゐるから、此方からも聞かうともしなかつたけれど、お母さんがお前の處に一寸々々會ひに行つてゐるくらゐは分つてゐた。それゆゑ安火を入れるのだけは、「あの人は寒がり性だから、朝寢起きに安火を入れてあげておくれ。」とでもお前から言つたのだらうと思つた。

それでも何うも夜も落々眠られないし、朝だつて習慣になつてゐることが、がらりと樣子が變つて來たから寢覺めが好くない。以前屢くお前に話し〳〵したことだが、朝熟く寢入つてゐて知らぬ間に靜と音の立たぬやうに新聞を胸の上に載せて貰つて、その何とも言へない朝らしい新らしい匂ひで、何時とはなく眼の覺めた日ほど心持の好いことはない。まだ幼い時分に、母が目覺しを枕頭に置いてゐて、「これツこれツ。」と呼び覺してゐたと同じやうな氣がしてゐた。それが最早、まさか新聞まで寢入つてゐる間に持つて來て下さい、とは言はれないし、假令さうして貰つたからとて、お前にして貰つたやうに、甘くしつくりと行かないと思つたから賴みもしなかつた。が、時々其樣なことを思つて一つさうして貰つて見ようかなどと寢床の中で考へては、ハツと私は何といふ馬鹿だらうと思つて獨りでに可笑くなつて笑つたこともあつたよ。

で、新聞だけは自分で起きて取つて來て、また寢ながら見たが、さうしたのでは唯字が眼に入るだけで、もう面白くも何ともありやしない。……本當に新聞さへ澤山取つてゐるばかりで碌々讀む氣はしなかつた。

それに、あの不愛想な人のことだから、何一つ私と世間話をしようぢやなし。――尤も新聞も面白くないくらゐだから、そんなら誰れと世間話をしようといふ興も湧かなかつたが――米だつて惡い米だ。私はその、朝無闇に早く炊いて、私の起きる頃には、もう可い加減冷めてポロ〳〵になつた御飯に茶をかけて流し込むやうにして朝飯を濟ました。――間食をしない私が、何樣なに三度の食事を樂みにしてゐたか、お前がよく知つてゐる。さうして獨りでつくねんとして御飯を食べてゐるのだと思つて來るとむら〳〵と逆上げて來て果ては、膳も茶碗も霞んで了ふ。

寢床だつて暫時は起きたまゝで放つて置く。床を疊む元氣もないぢやないか。枕當の汚れたのだつて、私が一々口を利いて何とかせねばならぬ。

秋になつてから始終雨が降り續いた。あの古い家のことだから二所も三所も雨が漏つて、其處ら中にバケツや盥を並べる。家賃はそれでも、十日ぐらゐ遲れることがあつても拂つたが、幾許直してくれと言つて催促してもなか〳〵職人を寄越さない。寒いから障子を入れようと思へば、どれも破れてゐる。それでも入れようと思つて種種にして見たが、建て付けが惡くなつて何れ一つ滿足なのが無い。

私はもう「えゝ何うなりとなれ！」と、バタリ〳〵雨滴の落ちる

音を聞きながら、障子もしめない座敷に靜として、何を爲ようでもなく、何を考へようでもなく、四時間も五時間も唯呆然となつて坐つたなり日を暮すことがあつた。

何日であつたか寢床を出て鉢前の處の雨戸を繰ると、あの眞正面に北を受けた緣側に落葉交りの雨が顏をも出されないほど吹付けてゐる。それでも私は寢卷の濡れるのをも忘れて、其處に立つたまゝ凝乎と、向の方を眺めると、雨の中に遠くに久世山の高臺が見える。そこらは私には何時までも忘れることの出來ぬ處だ。それから左の方に銀杏の樹が高く見える。それがつい四五日氣の付かなかつた間に黃色い葉が見違へるばかりにまばらに瘦せてゐる。私達はその下にも住んでゐたことがあつたのだ。

そんなことを思つては、私は方々、目的もなく歩き廻つた。天氣が好ければよくつて戶外に出るし、雨が降れば降つて家內にぢつとしてゐられないで出て歩いた。破れた傘を翳して出歩いた。

さうしてお前と一緒に借りてゐた家は、古いのから古いのから見て廻つた。けれども何の家の前に立つて見たつて、皆な知らぬ人が住んでゐる。中には取拂はれて、以前の跡形もない家もあつた。

でも九月中ぐらゐは、若しかお前のゐる氣配はせぬかと雨が降つてゐれば、傘で姿が隱せるから、雨の降る日を待つて、柳町の家の前を行つたり來たりして見た。

家內にゐる時は、もう書籍なんか讀む氣にはなれない。大抵猫と遊んでゐた。あの猫が面白い猫で、あれと追駈ツこをして見たり、樹に逐ひ登らして、それを竿でつゝいたり、弱つた秋蟬を捕つてやつたり、ほうせん花の實つて彈けるのを自分でも面白くつて、むしつて見たり、それを打つけて吃驚させて見たり、そんなことばかりしてゐた。處がその猫も、一度二日も續いて土砂降りのした前の晚、些との間に何處へ行つたか、ゐなくなつて了つた。お母さんと二人で種々探して見たが遂に分らなかつた。

そんな寂しい思ひをしてゐるからつて、これが他の事と違つて他人に話の出來ることぢやなし、また誰れにも話したくなかつた。唯獨りの心に閉ぢ籠つて思ひ耽つてゐた。けれどもあの矢來の婆さんの家へは始終行つてゐた。後には「また想ひ遣りですか。……あなたが、あんまりお雪さんを虐めたから。……またあなたもみつちりお働ぎなさい。さうしたらお雪さんが、此度は向から頭を下げて謝つて來るから。……」などと言つて笑ひながら話すこともあつたが、あの婆は、丁度お前のお母さんと違つて口の上手な人でもあるし、また若い時から隨分種々な目にも會つてゐる女だから、

「本當にお雪さんの氣の强いのにも呆れる。……私だつて、あゝして四十年連れ添うた老爺さまと別れは別れたが、あゝ今頃は何うしてゐるだらうかと思つて時々呼び寄せては、私が狀袋を張つたお錢で好きな酒の一口も飲まして、小遣ひを遣つて歸すんです。……私には到底お雪さんの眞似は出來ない。……思ひ切りの好い女だ。それを思ふと雪岡さん、私はあなたがお氣の毒になりますよ……」

と言つて、襦袢の袖口で眼を拭いてくれるから、私のことと婆さんのこととは理由が全然違つてゐるとは知つてゐながら、

「ナニお雪の奴、そんな人間であるもんですか。……それに最早、何うも嫁いてゐるらしい。屹度それに違ひない。」と言ふと、婆さんは此度は思はせ振りに笑ひながら、

「へ……奴なんて、まあ大層お雪さんが憎いと思はれますね。まさか其樣なことはないでせう。……私には分らないが、……お雪さんだつて、あれであなたの事は色々と思つてゐるんですよ……。あの自家の押入れに預かつてある茶碗なんか御覽なさいな。壞れないやうに丹念に一つ一つ紙で包んで仕舞つてある。矢張しまたあなたと所帶を持つ下心があるからだ。……あんなに細かいことまでしやんしやんとよく氣の利く人はありませんよ。」と、斯う言ひ〳〵した。

私は、私とお前との間は、私とお前とが誰れよりもよく知つてゐると知つてゐたから婆さんがそんなことを言つたつて決して本當にはしやしない。隨分度々、お前には引越の手數を掛けたものだが、

その度毎に、茶碗だつて何だつて丁寧に始末をしたのは、私も知つてゐる――尤も後になつては、段々お前も、「もう茶碗なんか、丁寧に包まない。」と言ひ出した。それも私はよく知つてゐる。また其れがいよ〳〵別れねばならぬことになつて、一層丁寧に、私の所帶道具の始末をしてくれたのも知つてゐる。

それでゐて、私は柳町の人達よりも一層深い事情を知らぬ婆さんが、さう言つてくれるのを自分でも氣安めだ、と承知しながら、聞いてゐるのが何よりも樂みであつた。私は寄席にでも行くやうなつもりで、何か買つて懷中に入れては婆さんの六十何年の人情の節を付けた調子で「お雪さんだつて、あれであなたのことは思つてゐるんですよ。」を聞きに行つた。

さうしながら心は種々に迷うた。何うせ他へ行かねばならぬのだから家を持たうかと思つて探しにも行つた。出歩きながら眼に着く貸家には入つても見た。が、婆さんを置くにしても、小女を置くにしても私の性分として矢張し自分の心を使はねばならぬ。それに敷金なんかは出來やうがない。少し纏まつた錢の取れる書き物なんかする氣には何うしてもなれない。それなら何うしようといふのではないが、唯何にでも魂魄が奪られ易くなつてゐるから、道を歩きながら、フト眼に留つた見知らぬ女があると、浮々と何處までも其の後を追うても見た。

長く男一人でゐれば、女性も欲しくなるから、矢張し遊びにも行つた。さうかと言つて錢が無いのだから、好くつて面白い處には行けない。それゆゑ錢の入らない珍らしい處を〳〵と漁つて歩いた。ならうならば、何もしたくないのだから、家賃とか米代とか、お母さんに酷しく言はれるものは、據なく書き物をして五圓、八圓取つて來たが、其樣な處へ遊びに行く錢は、「あゝ行きたい。」と思へば段々段々と大切にしてゐる書籍を凝乎と、披いて見たり、捻つて見たりして、「あゝこれを賣らうか遊びに行かうか。」と思案をし盡して、最後にはさて何うしても賣つて遊びに行つた。矢來の婆さんの處にも度々古本屋を連れ込んだ。さうすれば、でも二三日は少しは心が落着いた。

その時分のことだらう。居先きは明さないが、一度お前が後始末の用ながらに婆さんの處へ寄つて、私の本箱を明けて見たり、抽斗を引出して見たりして、

「まあ本當に本も大方賣つて了つてゐる。あの人は何日まで、あゝなんだらう。」と言つて、それから私の夜具を戸棚から取出して、黴を拂つて、緣側の日の當る處に乾して、婆さんに晩に取入れてくれるやうに賴んで行つたことをも聞いた。

まあさういふやうにして、ちよび〳〵書籍を賣つては、錢を拵へて遊びにも行つた。けれども、それでも矢張し物足りなくつて、私の足は一處にとまらなかつた。唯女を買つただけでは氣の濟む譯がないのだ。私には一人樂みが出來なければ寂しいのも間切れない。

處がさうしてゐる内に、遂々一人の女に出會した。

それが何ういふ種類の女であるか、商賣人ではあるが、藝者ではない、といへばお前には判斷出來よう。一口に藝者でないと言つたつて――笑つては可けない。――さう馬鹿には出來ないよ。遊びやうによつては隨分錢も掛かる。加之女だつて銘々性格があるから、藝者だから面白いのばかしとは限らない。

その時は、多少纏まつた錢が骨折れずに入つた時であつたから、何時もちよび〳〵本を賣つては可笑な處ばかしを彷徨いてゐたが、今日は少し氣樂な贅澤が爲て見たくなつて、一度長田の友達といふので行つた待合に行つて、その時知つた女を呼んだ。さうするとそれがゐなくつて、他な女が來た。それが初め入つて來て挨拶をした時にちらと見たのでは、それほどとも思はなかつたが、別の間に入つてからよく見ると些と男好きのする女だ。――お前が知つてゐる通り私はよく斯樣なことに氣が付いて困るんだが、――脫いだ着物を、一寸觸つて見ると、着物も、羽織も、ゴリ〳〵するやうな好いお召の新らしいのを着てゐる。此の社會のことには私も大抵目が利

いてゐるから、それを見て直ぐ「此女は、なか〳〵賣れる女だな。」と思つた。

よく似合つた極くハイカラな束髪に結つて小肥な、色の白い、肌理の細かい、それでゐて血氣のある女で、――これは段々後になつて分つたことだが、――氣分もよく變つたが、顏が始終變る女だつた。――心もち平面の、鼻が少し低いが私の好きな口の小さい――尤も笑ふと少し崩れるが、――眼も平常はさう好くなかつた。でもさう馬鹿に濃くなくつて、柔か味のある眉毛の恰好から額にかけて、何處か氣高いやうな處があつて、泣くか何うかして憂ひに沈んだ時に一寸々々品の好い顏をして見せた。そんな時には顏が小く見えて、眼もしをらしい眼になつた。後には種々なことから自暴酒を飲んだらしかつたが、酒を飲むと溜らない大きな顏になつて、三つ四つも古けて見えた。私も「どうして斯樣な女が、さう好いのだらう？」と少し自分でも不思議になつて、終には淺間しく思ふことさへもあつた。肉體も、厚味のある、幅の狹い、さう大きくなくつて、私とはつりあひが取れてゐた。

で、その女をよく見ると、「あゝ斯ういふ女がゐたか。」と思つた。それが、その女が私の氣に染み付いたそも〳〵だつた。さうすると、私の心は最早今までと違つて何となく、自然に優あしくなつた。

靜と女の指――その指がまた可愛い指であつた、指輪も好いのをはめてゐた――を握つたり、もんだりしながら、

「君は大變綺麗な手をしてゐるねえ。さうして斯う見た處、こんな社會に身を落すやうな人柄でもなささうだ。それには何れ種々な理由もあるのだらうが出來ることなら、少しも早く斯樣な商賣は止して堅氣になつた方が好いよ。君は何となしまだ此の社會の灰汁が骨まで浸込んでゐないやうだ。惜しいものだ。」

人間といふものは勝手なものだ。斯樣な境涯に身を置く人に同情があるならば、私は何の女に向つても、同じことを言ふ理由だが、私は其の女にだけそれを言つた。さう言ふと、女は指を私に任せながら、默つて聞いてゐた。

「名は何といふの？」

「宮。」

「それが本當の名？」

「えゝ本當は下田しまといふんですけれど、此處では宮と言つてゐるんです。」

「宮とは可愛い名だねえ。……お宮さん。」

「えッ。」

「私はお前が氣に入つたよ。」

「さうオ……あなたは何をなさる方？」

「さあ何をする人間のやうに思はれるかね。言ひ當てゝ御覽。」

さういふと、女は、しを〳〵した眼で、まじ〳〵と私の顏を見ながら、

「さう……學生ぢやなし、商人ぢやなし、會社員ぢやなし、……判りませんわ。」

「さう……判らないだらう。まあ何かする人だらう。」

「でも氣になるわ。」

「さう氣にしなくつても心配ない。これでも惡いことをする人間ぢやないから。」

「さうぢやないけれど……本當言つて御覽なさい。」

「これでも學者見たやうなものだ。」

「學者！　……何學者？　……私、學者は好き。」

本當に學者が好きらしう聞くから、

「さうか。お宮さん學者が好きか。此の土地にや、お客の好みに叶ふやうに、頭だけ束髪の外見だけのハイカラが多いんだが、お宮さんは、ぢや何處か學校にでも行つてゐたことでもあるの？」

學生とか、ハイカラ女を好む客などに對しては、その客の氣風を察した上で、女學生上りを看板にするのが多い。――それも商賣を

してゐれば無理の無いことだ。――その女も果して女學校に行つて居つたか、何うかは遂には分らなかつたが所謂學者が好きといふことは、後になるに從つて本當になつて來た。

斯う言つて先方の意に投ずるやうに聞くと、

「本郷の××女學校に二年まで行つてゐましたけれど、都合があつて廢したんです。」と言ふから、ぢや何うして斯樣な處に來てゐる……と訊いたら、斯うしてお母さんを養つてゐると言ふ。お母さんは何處にゐるんだ？　と聞くと、下谷にゐて、他家の間を借りて、裁縫をしてゐるんです、と言ふ。

私は、全然直ぐそれを本當とは思はなかつたけれど、女の口に乘つて、紙屋治兵衞の小春の「私一人を賴みの母樣。南邊の賃仕事して裏家住み……」といふ文句を思ひ起して、お宮の母親のことを本當と思ひたかつた。……否、或は本當と思込んだのかも知れぬ。

お前が斯樣なことをしてお母さんを養はなくつてもほかに養ふ人はないのか？　と訊くと、姉が一人あるんですけれど、それは深川のある會社に勤める人に嫁いでゐて先方に人數が多いから、お母さんは私が養はなければならぬ、としをらしく言ふ。

「さうか。……ぢや宮といふ名は、小說で名高い名だが、宮ちやん、君は小說のお宮を知つてゐるかね？」

「えゝ、あの貫一のお宮でせう？　知つてゐます。」

「さうか。まあ彼樣なものを讀む學者だ。私は。」

「ぢやあなたは文學者？　小說家？」

「まあ其處等あたりと思つてゐれば可い。」

「私もさうかと思つてゐましたわ。……私、文學者とか法學者だとか、そんな人が好き。あなたの名は何といふんです？」

「雪岡といふんだ。」

「雪岡さん。」と、獨り飲込むやうに言つてゐた。

「宮ちやん、年は幾歲？」

「十九。」

十九にしては、まだ二つ三つも若く見えるやうな、派手な薄紅葉色の、シツポウ形の友禪縮緬と水色繻子の狹い腹合せ帶を其處に解き棄ててゐたのが、未だに、私は眼に殘つてゐる。

暫時そんな話をしてゐた。

それから抱占めた手を、長いこと緩めなかつた。痙攣が驚くばかりに何時までも續いてゐた。私はその時は、本當に嬉しくつて、腹の中で笑ひ〳〵靜として、先方に自分の全身を任してゐた。漸と私を許してから三四分間經つて此度は俯伏しになつて、靜と他の枕の上に、顏を以て來て載せて、半ば夢中のやうになつて、苦しい呼吸をしてゐた。私は、さうしてゐる束髮の何とも言へない、後部の、少し潰れたやうな黑々とした形を引入れられるやうに見入つてゐた。

さうして長襦袢と肌襦袢との襟が小さい頸の形に圓く二つ重なつてゐる處が堪らなくなつて、そつと指先で突く眞似をして、

「おい何うかしたの？　……何處か惡いの？」と言つて、掌で背をサアツ〳〵と撫でてやつた。

すると、女は、

「いえ。」と、輕く頭振を掉つて、口を壓されたやうな疲れた聲を出して、「極りが惡いから……」と潰したやうに言ひ足した。さうして二分間ほどして魂魄の脫けたものゝやうに、小震ひをさせながら、搖々と、半分眼を瞑つた顏を上げて、それを此方に向けて、頰を擦り付けるやうにして、他の口の近くまで自分の口を、自然に寄せて來た。さうして復た枕に顏を斜に伏せた。

私は、最初から斯樣な嬉しい目に逢つたのは、生れて初めてであつた。

水の中を泳いでゐる魚ではあるが、私は急に、そのまゝにして置くのが惜しいやうな氣がして來て、

「宮ちやん。君には、もう好い情人が幾人もあるんだらう。」と言

つて見た。

すると、お宮は、眼を瞑つた顔を口元だけ微笑みながら、

「そんなに他人の性格なんか直ぐ分るもんですか。」甘えるやうに言つた。私は性格といふ言葉を使つたのに、また少し興を催して、

「性格！　……性格なんて、君は面白い言葉を知つてゐるねえ。」

と世辭を言つた。——兎に角漢語をよく用ひる女だつた。

さうして私は、唯柔かい可愛らしい精神になつて、蒲團を疊む手傳ひまでしてやつた。

他の室に戻つてから、

「また來るよ。君の家は何といふ家？」

「家は澤村といへば分ります。……あゝ、それから電話もあります。電話は浪花のね三四の十二でせう。それに五つ多くなつて、三四十七、三千四百十七番と覺えてゐれば好いんです。」と立ちながら言つて疲れて、顳顬の邊を蒼くして歸つて行つた。

私は、何だか俄かに枯木に芽が吹いて來たやうな心持がし出して、——忘れもせぬ十一月の七日の雨のバラ〳〵と降つてゐた晩であつたが、私も一足後から其家を出て番傘を下げながら——不思議なものだ、その時ふと傘の破れてゐるのが、氣になつたよ。種々な屋臺店の幾個も並んでゐる人形町の通りに出た。濕とりとした小春らしい夜であつたが、私は自然にふい〳〵口淨瑠璃を唸りたいやうな氣になつて、すしを摘まうか、やきとりにしようか、と考へながら頭でのれんを分けて露店の前に立つた。

その錢が入つたら——例の箱根から酷しくも言つて來るし、自分でも是非そのまゝにしてゐる荷物を取つて來たり、勘定の仕殘りだのして二三日遊んで來ようと思つてゐたのだが、私はもう箱根に行くのは厭になつた。で、種々考へて見て箱根へは爲替で錢を送ることにして、明日の晩早くからまた行つた。さうして此度は泊つた。

——斯ういふ處へ來て泊るなんといふことは、お前がよく知つてゐる、私には殆ど無いと言つて可い。

續けて行つたものだから、お宮は、入つて來て私と見ると、「さては……」とでも思つたか「いらツしやい。」と離れた處で尋常に挨拶をして、此度上げた顔を見ると嬉しさを、キユツと紅をさした脣で小さく食ひ締めて、誰れが來てゐるのか、といつたやうな風に空とぼけて、眼を遠くの壁に遣りながら、少し、頸を斜にして、默つてゐた。その顏は今に忘れることが出來ない。好い色に白い、意地の强さうな顏であつた。二十歳頃の女の意地の强さうな顏だから、私には唯美しいと見えた。

私は可笑くなつて此方も暫く默つてゐた。けれども、私はそんなにして默つてゐるのが嫌ひだから、

「そんな風をしないでもつと此方においで。」と言つた。

待つてゐる間、机の上に置いてあつた硯箱を明けて、卷紙に徒ら書きをしてゐた處であつたから机の向に來ると、

「宮ちやん、之れに字を書いて御覽。」

「えゝ書きます。何を？」

「何とでも可いから。」

「何かあなたさう言つて下さい。」

「私が言はないつたつて、君が考へて何か書いたら可いだらう。」

「でもあなた言つて下さい。」

「ぢや宮とでも何とでも。」

「……私書けない。」

「書けないとはなからう、書いてごらん。」

「あなた神經質ねえ。私そんな神經質の人嫌ひ！」

「……。」

「分つてゐるから、……あなたのお考へは。あなた私に字を書かして見て何うするつもりか、ちやんと分つてゐるわ。ですから、後で手紙を上げますよ。あゝ私あなたに濟まないことをしたの。名刺を貰つたのを、つい無くして了つた。けれど住所はちやんと憶えてゐます。……××區××町××番地雪岡京太郎といふんでせう。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com